

論点 オピニオン1000

「論点」は毎月第3水曜日掲載



桜はバラ科サクラ属サクラ亜属の総称。ひと口に桜と言ってもその種類は実に多い。だが、一般的に桜と言えば、ソメイヨシノを思い浮かべる人が多いに違いない。

ソメイヨシノは、野生種のおオシマザクラとエドヒガンの交雑種とされ、江戸末期から明治初期に作出された比較的新しい品種。全国各地に急速に広がり、現在は日本の桜の8割を占めるとも言われる。

同一個体の花粉では受精が行われない自家不和合性により、接ぎ木や挿し木によって増やされる。いわば「クローン」であり、遺伝的に均一なので全国の開花の基準ともなる。

野生種にはほかに、ヤマザクラ、オ

「クローン」のソメイヨシノ

オヤマザクラ、カスミザクラ、マメザクラなどがある。桜には人為的交配などで作られた栽培品種も数多く、300を超す品種が存在するとされる。

桜の語源は諸説ある。『桜の雑学事典』(井筒清次著)などによると、例えば「桜の霊である木花サキヤ(咲耶・開耶)から、サキヤの転「サキウラ(咲麗)の約」…穀霊の意の「サ」と神が座る「クラ(座)」で、「穀霊の恵りつく神座の意」との説もあり、民俗学者らは多くの説をとるとする。

今年の桜はスピード開花のようである。冬場に気温が低く、花芽が寒気にさらされて目覚める「休眠打破」が順調だったことや、2月末以降の暖かさが要因と気象庁はみている。各気象情報会社の前橋の開花予想日は「25日」「27日」など。花のうたげも早まりそうだ。



下仁田町・長楽寺の境内にあるシダレザクラ=2012年4月撮影



治療後、花を咲かせた旧六合村の老桜=2010年5月撮影、塩原さん提供

春との出合いは桜との出合いでもある。今年もまた桜の季節が巡ってくる。ソメイヨシノ、そしてヤマザクラ…。樹木を覆い隠すように花が満ちあふれる光景は、生命の輝きにも似て、心ざわめく。桜をどう眺め、どう守るのか、桜に寄せる日本人の心とは。

桜を愛でる



樹木医

塩原 貴浩さん(37)



長楽寺住職

峯岸 正典さん(59)



OCB会代表

横倉 興一さん(69)

個性的なヤマザクラ

日本列島の桜はソメイヨシノを中心に大きく分けて、東は寒冷地型のオヤマザクラ、西はヤマザクラが分布する。エドヒガンなども含めて、本県は地理的にちょうど、これらの種が交錯する場所に当たる。

高崎市の観音山丘陵はヤマザクラが東西7、南北5に分布して群生する。多種多様な交配種が認められ、白系、濃淡のピンク系と変化に富んだ色合いの景観が楽しめる。

高崎市の観音山丘陵はヤマザクラが東西7、南北5に分布して群生する。多種多様な交配種が認められ、白系、濃淡のピンク系と変化に富んだ色合いの景観が楽しめる。

大きな魅力だ。また、白衣の観音の周辺にはカスミザクラも見られる。ソメイヨシノと異なり、ヤマザクラは実に個性豊かな桜と言える。

開花の季節を迎えると、ヤマザクラはかすみのように山を覆い、絶景をつくり出す。その風情を形容するなら「貴い」と言える。

高崎市の観音山丘陵はヤマザクラが東西7、南北5に分布して群生する。多種多様な交配種が認められ、白系、濃淡のピンク系と変化に富んだ色合いの景観が楽しめる。

「和」を象徴する花見

「花七日」という言葉が桜にはある。つぼみが膨らみ、満開となり、そして見る見る散っていく。散っても余情がささいとおしまれる。日本人にとって、ものあわれが心にしみる特別な花であると言える。

平安時代の歌人、紀友則は「久方の光のどけき 春の桜をばし「つくり」は口私目にしつ心なく、花の散るらむ」と詠んだ。桜の花は落ち着いた心がなく急ぎ散ってしまつと詠めるが、同時に、見る側の心も落ち着きをしつてしまつてしまっている。集い、一つのことを楽しみ、心を通わせる。うたげのなかでも、持ち寄り料理を大勢で分ち合せている。

古来日本の社会では「和」が重んじられてきた。「和」を漢字の「のぎへん」という漢字の「つくり」は口私目にしつ心なく、花の散るらむ」と詠んだ。桜の花は落ち着いた心がなく急ぎ散ってしまつと詠めるが、同時に、見る側の心も落ち着きをしつてしまつてしまっている。集い、一つのことを楽しみ、心を通わせる。うたげのなかでも、持ち寄り料理を大勢で分ち合せている。

「和」の象徴で、大勢がだが、日本では相手に合わせが和むようにとの配慮で植えられたのだろう。花を育ててかせる行為は、皆のために尽くす善行でもある。

桜は春という季節のさきがけ。開花時期は、農耕の開始や卒業、入学シーズンと重なる。出会いと別れ、希望と挫折、悲喜(こも)もを呑みながら新しい出発を彩る花である。だからつと、日本人の心をつかんで離さなかつた心、これからもうあり続けらるだろう。

個性を出せるような品種へ転換してよいのではないかと、花の咲き具合に一喜一憂するものも一興だが、公園や学校など身近な場所に、自分の桜を決めて、四季を通して観察してみたいが、春は花がさつたら、芽出しの淡い緑、赤や黄色の紅葉、裸になった冬の枝ぶりなど、花以外にも魅力はたくさんある。または人里離れた山奥にお気に入りの一本を決めて、毎年花の時期に会いに行けるのもいい。にぎやかなうたげも結構だが、日常を離れ、桜を通して自分自身と対話するものも花見だと思う。

「守り」の発想で育成

旧六合村(現中之条町)小倉地区で2008年、老桜の治療を手掛けた。地元の人たちも総出で土壌改良したり、枯れ枝の除去を行った。桜の前で思い出せる人々たちを見て、「再び元気になるってほしい」と願うがらの治療だった。みんなの気持ちが伝わったのか桜は翌春、たくさんの花を咲かせた。このように桜は地域のシンボルとして人々の結びつきを強めている。

桜の衰退にはさまざまな要因がある。ソメイヨシノは病害虫に弱く、てんぐ巣病が全国的問題になっている。このほかに、工事の掘削で根が傷つき、腐朽が進んだり、根元まで舗装して雨水が浸透しなくなるなど、人為的な損傷や都市の肥大化と環境変化により、健全な生育が妨げられるケースも多い。花見の時期という発想でないといける過剰な踏圧も一因だ。情報化社会の現在、それまで限られた地域の中で愛でられてきた桜に連日、大勢の人々が押し寄せる。根元の土が踏み固められると、水や空気が通さなくなる。根が傷み、小枝の枯れが目立つようになってしまう。

桜を育てるには、公園の樹木のように毎年業者が代わりたり、工期が決まられているのようでもある。桜の品種は現在300を超え、中には個人の庭に植栽可能な小型品種もある。ソメイヨシノの画一的な植栽をやめ、病害虫に強い古来のヤマザクラや地域の



前橋公園のソメイヨシノ=2012年4月撮影



高崎市・観音山丘陵のヤマザクラ=2011年4月撮影、横倉さん提供